

やまどり

令和5年度

群馬県支部俳句大会成績発表表

(特選 県支部長賞)

卯の花腐し立ち居の度に声を出し

小林 和子

(特選 上毛新聞社賞)

妙義槽に大の字凧と五月来る

黛 正登志

(入選)

光るもの身から外して和休の忌
防人の妻のいしぶみ露しけれ
團圞らの夢貼り合はせこのほり
とどりの埴輪の顔や春隣
白墨の伝言板や花の駅
花さびたじき師の狂へ辻曲がり
歯笑萌ゆる抜け穴あると真田井戸
菊蕪植つ砂義山塊迫る畑
程登を抱く迦陵頻伽図百十鳥
下校子の頭ちらほら妻の秋

林 恵美子
矢野間鶴霧
町田 洋子
吉藤 青楊
中嶋 孝子
永山比沙子
市村 一江
矢野間妙子
斎藤 博文
澤入 郁夫
(投句趣)

(選考)

無記名の作品を選考7名(原田清正・宮崎至夏子・武藤洋一・大塚洋二・古藤淳子・本涼薫・古澤草子)

俳人協会
群馬支部
☆
発行所
高崎市飯塚町737
TEL.027-361-0870



が各々10句選句した。高点句の中から特選・入選を決め、同点の場合は支部長が順位を決定した。

令和5年度群馬県支部会員

石井昭子 市村一江 岩崎登江 馬上親代 大井節子
大澤文字 大谷孝子 大塚洋一 荻原多香子 荻原富江
荻原葉月 楠沼あけ子 笠井智郁 片桐てい女
加藤楓子 金子美子 北爪武夫 北原東洋男 北村由美子
木下涼薫 木村恵里子 小島ますみ 小宮さくら
小林和子 小林多子 斎藤博文 酒井富子 櫻井なみ
佐々木美恵子 佐藤しづ 椎名和代 須賀静子
須川良子 杉木輝夫 杉山やまゆみ 鈴木乘風 善養寺瑠子
高橋孝子 高橋洋一 高橋聖子 田島文子 堤一巳
角田はる子 永塚菊江 中嶋孝子 永山比沙子
濱名博光 林恵美子 原田清正 深谷信郎 深谷征子
福田昌子 星照子 星野つらら 星野よ子 堀越純子
本田巖 真下章子 増田志津子 篤正登志 宮崎至夏子
武藤ふみ江 弥城節子 矢野間鶴霧 矢野間妙子
山谷三千江 吉井たけみ 古澤草子 吉沢美智子
吉藤青楊 古藤淳子 武藤洋一

(6月30日現在)

お奨めの吟行地

長 海

斎藤 博文

県史の方には遠方ですが、藤岡市街からは30分です。

到着、駅の周辺に軒車と石畳までは煎餅屋、鮎鮎屋、豆屋などを覗きながら歩いて行くのも、興、石畳はフリートと滑っていた地層が露出したもので、結晶片岩が6キロに及びます。大正5年には宮沢賢治が盛岡高等農林学校時代に「地球の窓」と言われ、宮澤の調査に訪れていて、後日詠んだ歌碑が上長瀬に建立されています。

つづくと「粋なもやうの博多帯」 芹吉しの片岩の色 宮沢賢治

登先は雪棚が石畳を真白覆ひ、カヌーもラフティンクが始まります。夏の8月15日には船頭が水神様を祀る舟玉祭があります。コロナで4年度も中止になっていますが、灯籠流し、万灯舟、打ち上げ花火は感動ものです。

秋にお薦めのなのは、七草畑です。それぞれのお寺は離れていますので、車で回るのが便利。特にお勧めなのは秋寺の洞昌院で、金子兜太の句碑と金子伊昔紅の元で学んでいた鹿嶋移公子の句碑が秋の下に並んでいます。

舞つごとし秋のきいも暮れて 金子兜太
萩咲きぬ映は春翁をくりかへし 馬場伊合子
冬には、宝登山の轆轤や健脚な人は宝登山から続く長瀬アルプス廻りも良いかと思えます。下山途中には天然水を切り出す阿佐美冷感の採水池があります。見どころは沢山、是非吟行してみてください。

第33回全国ふきわれ俳句大会

吹割谷合や沼田市の風物を詠んだ、自作の未発表作品を募集します。

投句料 2句1組につき1000円
投句締め切り 令和5年7月31日
問合せ先 3778-0303

沼田市利根町追目37番地「全国ふきわれ俳句大会実行委員会」事務局まで、電話・0274856211

令和5年群馬県支部俳句大会作品

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
岩崎 妥江	永塩 菊江	福田 昌子	加藤 周子	林 恵美子	山賀 春江	本田 巖	笠井 智郁	佐藤 ヒナ	吉井たくみ	北原東洋男
リハビリの杖を休めて初音きく	蒼天へ赤子手を上ぐ辛夷の芽 遊子めく馬上の人上風光る 気休めのサブリメントや日脚伸ぶ うららかなや牛に呼ばれて牛舎まで	空揺らす社の杜や萌葱色 夕星やけたるき声の春の鳩 老鶯やきざし崩れ寒城跡 雀どちあれやこしれやの冬葎	どんど火にあぶりし鯛くるくと エジプトへラインで送る雑煮膳	せせらぎに身を任せゆく花筏 山結ぶ鉄路一本花の客	曇天やはるか筑波嶺バスの旅 長閑けしやふるさと白梅ふみそむ	月光を轆しをりたる芒原 秋茄子の紺を研ぎ出す陽の光 風揚げて父との絆深くせり	たんぽぽのしかと根を張る笑顔かな ルテインを変へて歩くや春霞 人生の節目と仰ぐ帰雁かな	下萌をかがみてじつと慈しみ 萬世に絶ゆる事なし梅花かな 温川沿い水のアートの壁厚し	梅守の小枝しづかに整へる 白梅が香や道場に弓引き絞る	年逝くや戦と言ふ字の駆け回る 剃刀のひやり首すじ桂郎忌 山家軒干し菜干柿干し大根
23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
木村恵里子	吉澤 章子	濱名 博光	原田 清正	金子 禮子	矢野間稲霧	山谷三千江	鈴木 乗風	酒井 富子	高橋 榮子	佐々木美恵子
敷きつめる赤き絨緞落椿 表秋や幟はためく道の駅	啄木鳥の追ひ掛けつこや聖五月 厨から母の鼻歌子供の日	行く春を詮無きことと送りけり 塩花を振りて今宵は夏料理	心地よき風も仇なす白牡丹 新緑や峠を越えてたぐる蕎麦	熊除けの鈴があいさつ紅葉狩 吹く風も水の流れも春の色	山吹の咲けば藪とて明るくす 防人の妻のいしづみ露しぐれ	熊渡りの子らの息災冬澄めり 朝霧の晴れしボツカや水芭蕉	代田風柳田見下ろす湯かな 熊手買ふ祝儀弾みぬ西の市	見回すや近くに聞ゆ雉子の声 開拓地に住時を偲ぶ花辛夷	畏いてよし吹雪よししのさくらかな 地を掠め紫電一閃つぽくらめ	痛む膝忍び今年も種時す 蓬摘み湯掻けば灰汁が真緑に
35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25
小菅さと子	永山比沙子	中嶋 孝子	星野 秧子	大谷 孝子	吉藤 青楊	町田 洋子	石井 昭子	木下 涼薫	黛 正登志	萩原 富江
子のトラクター見守る夫の薄暮かな 開かれし本陣庭園みどり立つ	近よればますます大樹林立つ 花さびた亡き師の荘へ社曲がり	湧水の二寸の力夏来たたる 白墨の伝言板や花の駅	庭中を泥んこにして春の雨 聞き流すこにも心得春の月	雪解季つるつる剥ける茹で卵 三代に及ぶ鉄瓶新茶の香	窓開けて句会に風の祭笛 窓開けて句会に風の祭笛	園児らの夢貼り合はせこいのぼり 石碑の文字浮きたたす春疾風	重さうに五六輪吊るの花 かへで萌ゆ不入の滝の半跏像	若葉山映して水面澄み渡り 湖に細波光かり風薫る	たつぷりとまじ目の器チューリップ 妙義嶺に大の字凜と五月来る	白芍薬底に一線紅隠す 薫風の中たしかなる李語の中
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
萩原 富江	柿沼あい子	黛 正登志	木下 涼薫	石井 昭子	町田 洋子	吉藤 青楊	大谷 孝子	星野 秧子	中嶋 孝子	永山比沙子
ひと刷毛の色に浮きたつ山桜 若松や夕日の灯る雨傘	玄關に金魚の泳ぐ衣装箱 薫風の中たしかなる李語の中	白芍薬底に一線紅隠す 薫風の中たしかなる李語の中	湖に細波光かり風薫る 若葉山映して水面澄み渡り	道草を覚えはじめて花は葉に 鯉のぼり風の化身となりしかな	狭客の墓を仰げば苔の花 重さうに五六輪吊るの花	かへで萌ゆ不入の滝の半跏像 園児らの夢貼り合はせこいのぼり	石碑の文字浮きたたす春疾風 園児らの夢貼り合はせこいのぼり	窓開けて句会に風の祭笛 窓開けて句会に風の祭笛	雪解季つるつる剥ける茹で卵 三代に及ぶ鉄瓶新茶の香	庭中を泥んこにして春の雨 聞き流すこにも心得春の月

36	耕して小雀たちの遊びに来 命日や葉味たつぷり初戀 間違へて大の名子の名をくらんば 初夏の駐在ですと大さき 高階の旅の高揚明し 川に向く丸太の椅子や糸とんぼ 岐阜蝶に初めましてと声かくる カーネーションの大鉢抱へ息子来る 十葉の庭へ伸しちの卓を置く 風絶えて欠伸してや鯉のぼり 乳母車芽花流しに幌をあけ 水の手や肩強張らせ蜷覗く 山羊の仔の四肢を踏張り山笑ふ しびびを城あすと聞く立夏かな 大櫓根方に小諸すみれ咲く 野外コンサート果て囀へ返す森 起伏せず出城跡てふ牡丹寺 独り待つ無人の駅舎燕来る 銅像の見やる遠山春がすみ 破れ家のありし所や桜満つ はいチリスお目まばな二輪草 癒えし目に美しかばな庭若葉 青葉若葉甘露の雨に手を広ぐ 卯の花腐し立ち居の度に声を出し まほろばを歩き春愁忘れけり 頼もしや茄子苗すてに花をつけ 雨つつき薔薇一輪の部屋すがし 春半ば風は黄なりで吹き曝す 梨の花散らして悲し今朝の冷え 梅門たためて入る春日傘 水温み燥く園児の川遊び アカシアの花の天竺羅香しく びよんびよんと芝生に弾む雹の玉 しのがねの越後連山風光る 連雀の啄む寄生木や春めきぬ 薫風や居並ぶ埴輪唐を持つ 忠靈碑守る砲弾や青嵐 たまさかに集ふ友垣金銀花	星野うらら 真下 章子 須川 良子 大澤 文子 深谷 征子 小林多つ子 深谷 信郎 小林 和子 須賀 静子 品川 恵子 吉田八千代 吉藤 淳子 吉沢美智子										
49	緑立つ松の木陰や藤村碑 懐古園仔猫かけこむみやげ店 懐古園溪陰きりり椽の花 齒染萌ゆる抜け穴あると真田井戸 深谷をわたる若き篠笛五月 水緑や遠見る若き真田像 麦秋や祖父の遺したコンバイン 大輪の薔薇に強固な棘の茎 復讐の迷惑メロイ青嵐 蒟蒻植う妙義山塊迫る畑 老鶯に迎へられ入る山の宿 貸し馬の首揃へをりつつじ燃ゆ 箭のモヒコインリや土の盛り ブロッコリー入りたるの盛り 麦秋の空の続けよウクライナ たんぼぼを手に手に園児等の散歩 城跡の辞世の句詠む麦の秋 三日月と金星睦み聖母月 蜜袋開き山気を吸ひ込みぬ かはほりの夜は里山に広がる 若き日やゴッホの筆致追つてゆく 豆の飯嫌ひし少女母となる 月おぼろナイトサフアリの白き虎 薔薇園へ牛歩の車列うたあん 遠景に青信号や麦の秋 四阿に総身吹かる薔薇の風 今朝掃きしポーチ散く棕櫚の花 藤の花池に映れる野点かな 校庭に英霊碑あり鳥籠 千年櫻若き枝より芽吹きたる 琵琶を抱く迦陵頻伽笛千鳥 雨汗を濡めし様な山の笑ひ 雨後の朝足元照らす金盞花 ナイスショットボールが目ざす桜の木 耕して天に到るや開拓碑 ぬかあめに香も滴るや沈丁花 飛び立ちて紫ひふしじみ蝶	善養寺玲子 市村 一江 小柏 久男 矢野間妙子 山本 信子 北村由美子 原 清香 宮崎至夏子 弥城 節子 星 照子 斎藤 博文 樺澤紀久子 松本 力治										
62	あたたかやただそれだけでよきひと日 赤ん坊のいよよ本泣きうららかに こんなにも花屑積もり駐車場 天使の名負て微笑む垣の薔薇 水緑に大気洗はるヨリゴの座 マスク解除満載の花山法師 実桜や眞田神社の赤幟 雲流る上田城址や緑立つ 青楓掛る城垣の田舎 麦秋や黄金の煙火 学園の始業ベル鳴る聖五月 神主の慣れし手つきや夏剪定 尾灯曳き夕焼け空へまっしぐら 尾風や観音山のくわんおん 薫風や舗装レンガのバズルめく 亡き母と笑ひあふ暮春の朝 虚仮の世の模様さまさませみ水 桜満ち白き遠山空に溶け 下校子の頭ちらほら麦の秋 一山を覆いつくせし新樹光 咲き誇る野次敷を独り占め 歴史館埴輪を観く日焼の子 麦秋や移動パン屋は町外れ しがらみの無き声聞こゆ雨蛙 ひしめきて寄せたる十葉一花つつ カリヨンの塔の銀色雨風 開発の迫る田畑や柿若葉 カレデガソ着ては脱いで五月尽 親鸞の後追ふ丸き子鴨かな 群を行く月無き夜に初蚕 鷹鳩と化して無住の寺を守る にぎやかな絵馬のトンネル若葉風 うぐひすや剪らず街灯の庭にまた 一輪車泳ぐと漕ぐ河津薄雪 代はる代はる抱きし赤子や桐の花 村道の渋滞蛇の甲羅干し	金子笑子 高嶺 京子 須川眞理子 角田はる子 堀越 純 氏家 和子 澤入 郁夫 山岸恵美子 青木 洋 中村 明子 大塚 洋二 武藤 洋一										
61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49

秀句鑑賞

深谷征子

陽炎の向かうに存す母白寿

武藤ふみ江

白寿(九十九才)で天寿を全うされたお母様。一読そう思ったが、すぐに別の解釈が浮かんだ。ご存命で日常を共にしている母親の姿が見えてきたのです。介護を受けながらも穏やかに過ごす母の様子。だんだん現実から離れつつある母。陽炎の向こうから、私の母の最期も思い出させてくれます。

草摘んで授業に向ふ理科教師

眞塩えいこ

車で通う最近の教師にはできないことです。田舎の学校に赴任した先生。通学の途中、教材にするのでしょいか、ふと思いついて道端の春の草を摘んでいます。最近の先生は昔よりずいぶん忙しくなった、と言われます。それだけに、映画「二十四の瞳」の時代の素朴な風景が懐かしく思われます。

エーテルワイイス星散らすこと

風にゆれ

木村恵理子

日本では薄雪草の名で知られるエーテルワイイス。星を散らすような花の

形。すぐにミュージカルのサウンドオブミュージック、そしてアルプスの少女ハイジへと思いは飛んで行きます。涼やかなスイスの高原に遊んでいる気分になりました。

木五倍子咲く稚児行列のひとつ顔

永塩菊江

この稚児行列は、高崎市箕郷町の「きつねの嫁入り」に見られるもの。ひとつ顔から、子供たちの神妙な顔つきが見えてきます。小花が鎖のように連なる木五倍子、その下を子供たちが皆おなじ顔をして進んで行くのです。着物を着て顔にはきつねの化粧をした子供たちが、鮮やかに見えます。

四季の畔道

NHKの朝ドラ「らんまん」が好評だという。その論評の中で、「雑草という名の草はない」という牧野富太郎博士の言葉が紹介されていた。ドラマの中では、主人公がたびたび地面に伏して草を観察するシーンが登場するが、俳句を始めたばかりの頃、畦道の青い小さな花を「イヌフクリ」だと言う先輩を、尊敬の眼

差して眺めたことを思い出した。

さらに、買ったばかりの歳時記を開くと、「うまごやし」「なすな」「たんぼほ」といったどこにでもある草の名がならび、それぞれに例句まで載っているのに驚かされた。

「日本の俳句歳時記は、四季を知ることに関しては大英百科事典より優れている」と、誰かが書いていたが、確かにそうかもしれない。

膨大な数の季語の中で暮らして居る私たち。「草の心を知れ」と、博士の声が聞こえてくるようだ。(よ)

こらむしだりお

令和5年1月に始まった通常国会は最終盤で緊迫した。解散するかしないかが連日大きく報道され、「解散権」を握っている岸田首相の発言が「解散しない」から「考える」になり、さらに「しない」に変わったからだ。前回の総選挙が2021年10月。任期4年の半分も経っていないのに！という声が与党にもあったが、新聞には「解散」の文字が躍った。▼「支持率が就任以来低調だったが、G7広島サミットで上昇したから」「来年秋の党総裁任期までに支持率が上がる要素がない」「自民

党の議席はもし減っても過半数を割ることはない」などが「解散する」という理由だ。しかし、誰も予想しなかったことが起きた。息子の首相秘書官が公邸に親戚を集めて忘年会を開き、赤じゅうたんの敷かれた階段で閣僚気取りの写真を撮ったのだ。

▼回転すし店で醬油さしの口をなめ回し、その動画を自慢そうに世間に流布した事件があったが、あれと同じレベルの話だ。それが我が国の首相秘書官か。開いた口が塞がらないとはこのことだ。大袈裟に言えば、海外に日本の恥部をさらしたことになる。世論調査の結果は正直だ。支持率は一気に下がった。▼政治家には俳句を詠む人が多い。いや多かつたと言った方がよい。岸田首相は昨年11月、奈良県の富右衛門をアレントされた際、「柿食えば観光復活奈良のまち」と詠んだ。その前年は「柿食えばコロナ打ち勝ち奈良のまち」。前任者の菅義偉前首相は「柿食えばふるさとと思う奈良のまち」。工夫はもうろん独創性は微塵もない。日本の未来を託す前に、俳人協会永田町支部を設けた方が良さそうだ。

(M)